

〔講演要旨〕西津軽・男鹿間における歴史地震・津波の被害と復興 —元禄能代地震と宝永岩館地震—

白石 睦弥*(弘前大学大学院地域社会研究科)

§1. はじめに

西津軽・男鹿間の地域は、近世初期の100年ほどの間、大きな被害地震の記録は見られない。しかし、元禄七年(1694)の元禄能代地震を皮切りに、M6~7.7と推定される地震の発生が確認されるようになる。

これらの地震・津波に際して、弘前藩は様々な対応を行っている。ここでは、同地震および宝永元年(1704)の宝永岩館地震について、その被害と対応の様子だけでなく、藩政のあらましと対照してこの2地震がいかに同藩政へ影響を及ぼしたのかについても論及したい。

§2. 元禄能代地震

元禄能代地震は元禄七年五月二十七日(1694年6月19日)に発生した。マグニチュードは7.0で、現在の八郎瀧付近から能代にかけて震度6以上、青森県五所川原市付近から秋田市付近に至る範囲で震度5以上の揺れを感じたと推定されている。

弘前では、「大地所々割、其穴口より砂吹上げ、田畑共作物捨り、家屋の壁十支字に割れ、谷地は幅五・六寸深何程となく割れ、逃去候へ共足の立処もなく、世界も亡かと生きたる心地無之」(『封内事実秘苑』)というような状況であった。同史料には忍びの者が記録した秋田領の様子も確認できる。「秋田領鹿渡より上ハ痛不申、小繫より森岡迄能代辺家々不残倒れ、山崩れ人馬死傷夥しく、一々記ニ不暇」というような見分記録が残されているのである。

§3. 宝永岩館地震

宝永元年四月二十四日(1704年5月27日)に発生した宝永岩館地震は能代での被害が最大であった。こちらも推定マグニチュードは7.0前後で、現在の秋田県八峰町から能代市付近の地域で6以上、青森県西部と秋田県北部で5以上の震度であったと推定される。

能代の町屋の被害は、ほとんどが二次災害の火災で焼失したものと考えられ、倒壊家屋をあわせると約90パーセントにもものぼるといふ。

また、津軽平野では広い範囲で農業被害の記録が残され、地割れや農業用水の堰の破損が深刻であったことがわかる。上流で可動閉塞が発生し、下流で川が普段の10分の1ほども流れてこないことと、堰の破損により、荒田も多かった。

日中の地震であったことから、赤石組では農民た

ちが山仕事に出かけており、二十九日になっても戻らなかったために山崩れの下敷きになったと判断された。

「弘前藩庁日記(御国)」には、地震当日「硫黄山出火」と呼ばれる火災が発生したことも記録されているが、現場の人員だけですぐに消火されたことから、かなり小規模なものであったようだ(拙稿2008)。

海岸隆起の記録も多く見られ、同五月七日条には「秋田御領滝之間村と御当地大間越御境迄式里半程之内、海磯際より沖江百六・七拾間程宛増干申候」と、海岸線が160~170間(約300m)も移動したことが記されている。深浦では湊が浅くなったという(『浪岡町史』資料編13)。

多くの場所で山崩れも発生し、現在日本キャニオンと十二湖(大小33の湖沼が存在するが、大崩山から見た時に12個を確認できる)と称される景観が形成されたと考えられている。

津波も発生したようで、唐津船が破損し深浦に流れ着いた記録も複数見られる。

§4. 弘前藩の藩政と震災の影響

元禄能代地震が発生したのは、奇しくも翌八年に発生する元禄飢饉の前年であった。弘前藩中興の祖である第四代津軽信政の晩年、連続する災害が津軽領および近接地域を襲ったことになる。弘前藩では、翌九年には藩士の大量召し放ちが実施され、それから同十二年にかけて武家の格外移転を行うなど、大きな城下の再編が行われていた。

飢饉が発生する原因は幕藩体制における市場のあり方や石高制そのものにあるとされてから久しいが、前に述べたような弘前藩における元禄期の状況の端緒は元禄能代地震にあると見られるのではないかと。直後に発生した大飢饉により、翌年以降の元禄能代地震の被害・対応は大変に見えづらくなってしまった。

それから約十年が経過し、宝永岩館地震が発生する。この際に津軽領では広い範囲に農業被害の記録が見られる。津軽領の新田開発はこの頃までがピークとなっており、18世紀の初頭には頭打ちになるのだが、米以外に際立った特産品の無い津軽領において、また廻米システムの主体となった米を生産する農業における被害は深刻なものであった。そして、この農業用地の復旧こそが津軽領における復興と言えるものなのではないかと考える。